

戦争と平和を 考えるⅢ

9月13日 [土]

開講式 12:50~13:00

第1回

- 13:00~14:50 「戦争への〈抵抗と協力〉—三木清の場合—」
津田雅夫 (日本思想史)
- 15:00~16:50 「愛国心と戦争—日本とドイツの〈郷土文学〉を視座として—」
林 正子 (日本近代文学)

9月20日 [土]

第2回

- 13:00~14:50 「廃墟の街に生きるひとびと—チェチェン紛争の実像から考える—」
竹森正孝 (比較政治学・比較憲法学)
- 15:00~16:50 「“戦争の記憶”を、若い世代にどう伝えるか」
近藤真庸 (健康教育論)

9月27日 [土]

第3回

- 13:00~14:50 「〈無差別爆撃〉と都市復興—第二次世界大戦後の戦災復興事業—」
富樫幸一 (経済地理学)
- 15:00~16:50 「戦争とすまい—住居学の視点からみた戦争—」
合掌 顕 (環境心理生理学)

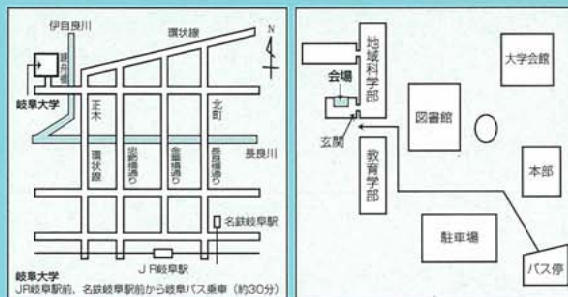
10月4日 [土]

閉講式と懇親会 16:10~

第4回

- 13:00~14:30 「経済統合と戦争抑止力—EUの事例をとおして—」
高橋 弦 (経済・社会政策論)
- 14:40~16:10 「恒久平和への展望—〈9条世界会議〉に参加して—」
吉田千秋 (哲学)

- 会 場 岐阜大学地域科学部 (岐阜市柳戸1番1) 1階 地101教室
- 受講対象者 関心のある方なら、どなたでも受講できます。
- 定 員 50名 (定員を超えたときは、お断りすることがあります)
- 受講料 7,200円 (学生 6,000円)
(納入後の受講料はお返しできません)
- その他 3回以上受講された方には修了証書 (岐阜大学) を授与します。



- 申込み方法 受講を希望される方は、「住所・氏名・年齢・電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により、下記へお申込みください。受講料納入方法 (銀行振込) については、お申込みいただいた後にご連絡いたします。

手話などの別途対応が必要な方は、お申し込み時にご相談下さい。

ご連絡いただいた皆様情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用致します。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合には、下記にご連絡下さい。

- 申込み期限 9月3日 (水)
- 申込み・問合せ先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1
岐阜大学地域科学部総務係
TEL: 058-293-3003
FAX: 058-293-3008
E-mail: chliki@gifu-u.ac.jp

第1回 9月13日(土) 開講式12:50~13:00

13:00~14:50

「戦争への〈抵抗と協力〉—三木清の場合—」

津田雅夫

戦争の問題を考えると、「抵抗と協力」の関係は単純ではありません。ファシズムへのレジスタンスの場合、一見すると、抵抗は明確な意思表示と行動のように思えます(じつは単純ではありません)。しかし二つの関係は、きわめて錯綜しています。とくに戦前日本の総動員体制の下、「協力的抵抗」と「抵抗的協力」を区別することは困難です。ほとんど融合しているのが実状であるからです。しかし、その区別を考へてみることは大事です。むしろ考へてみるなかで、はじめて今日の戦争と平和をめぐる複雑な問題が少し見えてきます。そして、われわれの戦争と平和への関わり方について反省する手がかりが得られます。本講義では戦後の混乱の中、獄死した哲学者、三木清(1897-1945)を取り上げ、彼の総動員体制のもとでの活動について振り返りながら、戦争への「抵抗と協力」について、その関わりを考へてみたいと思います。

第2回 9月20日(土)

13:00~14:50

「廃墟の街に生きるひとびと—チェチェン紛争の実像から考える—」

竹森正孝

ロシア南部のチェチェン共和国は、かつてトルストイやレールモントフが小説世界をとおして描いたことのある山岳の少数民族の小さな国です。この国が、その悲劇的な歴史ゆえに、ソ連崩壊以降、ロシア連邦からの独立をめざし、それを阻止せんとする連邦政府軍によって徹底した軍事攻撃を受け、その結果、甚大な人的被害を受けるとともに、主だった街が廃墟と化してしまっただけでなく、独立のための闘争が「テロ」とされ、武器を取る者も取らないひとびともが、爆撃や殺戮と略奪の対象とされ、かろうじて生存できたひとびとも難民と化すほかありませんでした。現代世界の各地で今もさまざまな武力紛争が続いていますが、そのほとんどすべてが悲惨で複雑な歴史を生きてきたひとびとの上に襲いかかって起きたものです。チェチェン紛争はその代表例だといえていいでしょう。今回は、北コーカサスに起きた地域紛争の実像を見るなかから、戦争と平和を考へてみたいと思います。

第3回 9月27日(土)

13:00~14:50

「〈無差別爆撃〉と都市復興—第二次世界大戦後の戦災復興事業—」

富樫幸一

都市にとつての最大の災厄であり、もっとも避けなければならないのは戦争や地震、大火などの災害です。第二次世界大戦では、人類史上初めての一般市民を犠牲に巻きこんだ都市への「戦略爆撃」が行われました。「戦時国際法」違反でもあったこのような戦争が、戦略爆撃調査団の報告や空襲被害の記録などから都市の側にも、さらに空軍などの側にも及ぼした被害を紹介してみます。こうした悲惨な戦争は、日本だけでなく、英米独にも逆に無差別爆撃を批判、反省する小説や映画を生み出しました。空襲で破壊された都市では、平和の時代に入ると戦災復興事業が行われます。日本では広い道路とコンクリートの建物が建設されて、車社会に対応する都市へと変わりましたが、ヨーロッパでは古い建物や町並を復元する努力が続けられました。このように都市の立場から、平和と戦争について考へていきたいと思います。

第4回 10月4日(土) 閉講式と懇親会16:10~

13:00~14:30

「経済統合と戦争抑止力—EUの事例をとおして—」

高橋 弦

現在、さまざまなレベルで経済統合の試行が認められます。EU、NAFTA、ASEANなどから、2国間の自由貿易協定(FTA)、経済連携協定(EPA)に至るまで多様な構成を呈しています。これらの国際的組織化は、基本的にはビジネスライクな発想・利害に由来する部分が多いことは間違いありませんし、IMF/WTO体制の一元的な世界編成に亀裂が入ったことを所与とする、その補完物ともいえるでしょう。しかし、これらはかつての帝国主義による植民地形成とは別のもので、ブロック化政策の再版でもありません。したがって、経済統合の進展は戦争抑止力得るはずという単純な結論付けに対しては、かりに「統合地域」内での戦争回避ができたとしても複数の統合地域間での「文明の衝突」まで阻止し得るのか、という疑問がただちに湧いてくるでしょう。ここでは、ナショナリズムと帝国主義との結合を封印するシステムとしての地域統合に着目する視点から、問題に迫ってみたいと思います。

15:00~16:50

「愛国心と戦争—日本とドイツの〈郷土文学〉を視座として—」

林 正子

日本において〈上からの愛国心〉が国民に教化されるようになったのは、「教育勅語」が公布され、日清戦争・日露戦争と続いた1890年代から1900年代にかけてのこと。それは、明治10年代後半に隆盛を極めた自由民権運動に対する反応であると同時に、〈大日本帝国〉となってゆく過程で生じた、国際的な摩擦への対応が意図されたものでもありました。天皇を家長とする〈国という家族〉に対しての〈愛〉が、国民に要請されることになったのです。この講義では、本来は祖国をかけがえのないものとしてたいせつに思う気持ちが、なぜ戦争と結びついてしまうのか、〈愛国心〉〈郷土愛〉と戦争の関係について考へることを目的としています。その際、近代化の諸相において、日本と多くの共通性・対照性を示していると考えられるドイツの場合を参照し、とくに第一次世界大戦後に盛んであった民俗学的研究や、民族主義の一翼を担った〈郷土文学〉の考へをとおして、〈愛〉によって戦争が引き起こされてゆく歴史的背景や思想的要因を明らかにすることをめざしています。

15:00~16:50

「戦争の記憶」を、若い世代にどう伝えるか」

近藤真庸

「〈いのち〉と人権の教育学」の立場から、「健康教育論」講義(対象:3年生)では、「水俣病」「ハンセン病」「薬害」等のテーマをとりあげ、受講生に、それらの「事件」を当事者の視座から歴史的追体験させることで、社会科学的な分析力や〈いのち〉への感性を育てることをめざしてきました。そのような実験的実践の成果のひとつとして、昨年度の公開講座では、「戦争の記憶」を『アサガオの詩』という朗読劇として作品化し、学生と共に演じました。その後、「当事者の前で公演する」という幸運にも恵まれました。二人の学生はそれぞれ、「戦争の記憶」を、若い世代にどう伝えるか」をテーマに、一人は中国人の立場から「日本の平和教育実践への提言」を、日本人学生は「戦争児童文学」というジャンルに着目し、松谷みよ子の作品分析を中心にした卒業論文を書き上げ、菓立っていきました。ここでは、二人の卒業論文を紹介しながら、「戦争の記憶」を作品化し、演ずることで、学生が何を学んでいったか」を探りながら、標記のテーマに迫りたいと考えています。

15:00~16:50

「戦争とすまい—住居学の視点からみた戦争—」

合掌 顕

明治・大正から昭和初期にかけて、我が国の住宅は、日常的に用いる調度の欧風化やそれに伴う「イス座の住まい方」など、さまざまな社会情勢の変化に影響を受けながら発展してきました。しかし、その後起こった第二次世界大戦は、人々の生活とその生活の基盤である住宅に、極めて大きな影響を与えました。それは、「戦時体制」のもとに人々の居住水準を極限まで制限し、さらには「建物疎開」による住宅の破壊や空襲によるストックの焼失など、量・質の両面において、それまでの住宅の発展を「逆行させる」ものでした。本講義では、明治期の「和洋折衷住宅」や「中廊下型住宅」、大正期の「文化住宅」から第二次世界大戦時の国民住宅、バラックや戦後の戦災者住宅への変遷などについて紹介し、戦争が人々の生活に与えた影響について、居住環境の視点から考へます。

14:40~16:10

「恒久平和への展望—〈9条世界会議〉に参加して—」

吉田千秋

これまで戦争が繰り返し行われ、そのたびに人びとは平和への願いを強く、様々な観智を実現してきました。とくに2度にわたる世界大戦を経験して、戦争放棄を明確にしたパリ不戦条約から国連憲章へ、そして平和的生存権と戦争放棄だけでなく、武力破棄と交戦権の否認を明記した日本国憲法制定への流れは、平和への熱望を世界史的レベルで具体化したものでした。でも、その後今日のイラク戦争に至るまで、戦争は絶えません。この状況にあって、世界の人びとが日本国憲法の前文と9条にあらためて注目し、本年5月に幕張で〈9条世界会議〉を開催しました。そこでは、国家ではなく「地球市民」が主人公となってこそ平和が切り開かれること、環境・貧困・ジェンダーなどの課題を解決することなくして平和はやってこないなど、様々な議論が交わされ、画期的な会議となりました。今回はそのDVDも映写し、恒久平和への展望を考へてみる機会にしたいと思います。